
3 匹におまかせ

東風こち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3匹におまかせ

【Nコード】

N9745E

【作者名】

東風こち

【あらすじ】

この何の変哲も無い平凡な日本に暮らしている一人の青年が、異世界の、しかも一見何の関わりもない事件に巻き込まれることに・

第一話 前兆

・まずは今回の登場人物の紹介だったりする。

赤坂 薫（１９才、）

無職で、バイトばかりやっている。ちょっと冴えない容姿であるが、

「将来は声優になってやる」という希望を持っている。とくに特技とい

ったものはないが、どのようなことにも顔を突っ込みたがり、どのような

なことにも挑戦してしまうといった困った性格である。

動物が好きで、今回の事件もその動物好きが災いして起こる。

第一話 前兆

赤坂薫は、腕を組み物思いにふけりながら公園を歩いていた。

薫は今年の３月に高校を卒業したばかりの、それでいて大学にも進学せ

ず、かといって専門学校にも行かずにずっとバイトをやっていた。

薫に言わせれば、「大学に行っただって、なにをするっていうんだ」と言う

ことだが、実は大学に行けるほどの成績を残せなかったこともあり、大学進

学を断念していた。そのうちに、専門学校への誘いや就職への勧めもあつた

が、薫はきっぱりと断っていた。「自分の進みたい道がはっきりしないうち

は何をやっても無駄だよ」というのが理由だった。

そして、薫が高校を卒業して早くも10ヵ月が過ぎ去ろうとしている12

月の鳥取県米子市。外は風が冷たくなっている時期である。

団地のすぐ脇にある公園には寒いからかどうか、遊んでいる子供の姿もま

ばらだった。といっても、日本の公園は狭くて遊びにくいのも当然のことか

もしれないな、と思う薫だった。

しかし、薫はそんなことにかまう余裕がなかったのかもしれない。

『どうしたというのだろうか？』薫は思った。

何かが変だった。しかし、それが何なのかは分からない。分からないから

不安になる。ただの気の迷いかな？とも思った。

ふと、目の前に犬がいた。柴犬だった。どうして今まで気が付かなかった

のか……。たぶん自分の思いに沈んでいたからだろう、薫はそう思った。

「クウーン、クウーン」

犬は薫の足元で鳴いていた。どうやらお腹をすかせているらしいかった。

「おー、よしよし……。ん、どうした？」

しかし犬は、何も言わない。ただ鳴いているだけである。

「飼い主はいないのかな？……。まあいいや、来いよ」

薫は歩きだした。犬は、少し離れて付いてきていた。

「ちょっと待ってな」

薫は、につこりしながら犬にそう言うと、駄菓子屋『河野屋』に入って行

った。そこでスナック菓子を買う。

「やっぱり駄菓子屋にはこんなものしかないか」

そして薫が河野屋から出てきた時、犬は姿を消していた。

「お？あれ・・・どこへ行ったんだ？」

しかし、薫の周りには誰もいなかった。

「何処にいったんだ？」

しかし、薫はすぐに、あの犬は飼い主の元に戻ったんだなと思った。

「まあ、あいつにも飼い主がいるんだよな・・・」

薫は、ちよつと淋しくなったように呟いて、虚しく空を見上げる。しかし、薫はその時妙な事に気が付いた。

「空の色ってこんなだったっけ？」

確かに、空の色が普段なら青いはずだが、紫色に見えた。

薫は目をこすって、もう一度空をよく見た。

「ん？やっぱり目の錯覚だよな。空が紫色な訳はないよな。ははは・・・」

笑って誤魔化す薫だった。

続く・・・

第一話 前兆（後書き）

とりあえずで作成している話ですが
長くなりそうなので、連載で掲載
することにしました
末永くおつきあいください

第二話 罌（前書き）

こことは違う世界でも、また何かが始まろうとしている。
いや、既に始まっているのかもしれない・・・。

第二話 罨

・まずは今回の登場人物の紹介だったりする。

ピック・カムラッシュ（37才、）

物静かな狩人である。狩人といえどもこの者の剣の技術には目を見張

るものがある。しかし、どういう訳か剣よりも飛び道具を使いなす。

いつも冷静沈着で、動揺を見せることもないくらいに鉄の心を持って
いる。

狩人であるにもかかわらず、実は宮廷騎士団で弓隊を率いている。

第二話 罨

ピック・カムラッシュは、囲まれていた。

「くそつ、不覚をとってしまったか・・・」

しかし、そう言ったところで状況は一向に良くなるわけではないことは分かっていた。

こんな状況になってしまった元々は、ピックがカルミール国王、ライデル

ク11世から、最近ストームフォレストに出没する妖魔を退治してほしいと

の要請を受けて、少数の精鋭を引き連れて出発したことに始まる。

カルミール王国の王都ミンテスを出発し、ストームフォレストに

至る道の

途中で妖魔との最初の遭遇をし、撃退した。そして、ストームフォレストに

到着するまでは何事もなかったものの、森に分け入ってからはずさんな目

に遇っていた。1人、又1人と行方不明になった。ピックはそれも妖魔の仕

業だろうと皆に言い、単独行動を禁止した。

にもかかわらず、今度は2人組で行動していた仲間も消えてしまった。

森の道もだんだんと険しくなり、最後には獣道すらなくなってきていた。

それでも、ピックは諦めずに妖魔の巣窟を探した。

しかし、ピック達の搜索も1日毎に限界に近付きつつあった。その時の人

数はもう3人であった。そして夜、ピック達は見張りを立てていたにもか

わらず襲われてしまい、なす術なく逃げ出してきたのだった。ところ

が、ピックは一人になってしまい、妖魔の軍団に追い詰められていた。

仲間がどうなったのかを確かめることもできず、自分の無力さを痛切に思

い知らされたピックであった。

周りには猿のような容姿の、しかし猿よりも獰猛で奇形な種族のゴブリン

が、手に手に棒きれを持って、今にも襲いかかろうとしていた。

頼みの武器も、こんなに多数の敵を相手に、しかも接近戦ではなおさら意

味を持たない。彼の武器はロングボウであった。飛び道具では今の状況を変

えることは難しい。しかしそれ以外にも彼は武器をちゃんと持っていたが、

短剣ではこの群がるように現われたゴブリンには立ち向かえない。

彼は、優れた戦闘の技術を持っていたし、ゴブリンなど恐れたこともない。

それでもこの数の差はいかんともしがたかった。しかも彼は、致命傷にはな

ってないものの大小様々な傷を負っていた。

「こんなところで・・・」

しかしそう言いながらも、ピックは諦めていなかった。どうにかして逃げ

出せる手立ては、と周りをじっくりと見回す。

何かあるはずだ、何か……。内心で思いを巡らしているところへ、突然

体中の力が抜けていく感覚を味わっていた。

「ん？これは・・・」

どうやら、ピックに魔法がかけられているようだった。

「ま、まさかそんなはずは・・・しかし・・・くそっ！」

ピックは内心の疑惑を振り払うかのように首を振り、目の前をじつと見据

えた。

ゴブリンはしばらく戸惑っているようだったが、ピックはゴブリン達など

見てはいなかった。ピックが見ていたのは、その後ろにいるはずの人物であ

った。

「隠れてても分かってるんだ、出てこいよ」

ピックの呼び掛けに応じてか、1人の人物がゴブリン達の後ろ、ちょうど

ピックの見ていた場所から現われた。

「ふつ、いつものごとくに勘の鋭い人ですね」

その人物はフード付きのマントを身につけており、顔には凝った模様の施

された仮面が付けられていて素顔は見えない。

「ふん、えらくなったものだな。グレッツ・バディースよ」

続く・・・

第二話 罨（後書き）

こんな感じの執筆ペースならなんとか
連載でも投稿できるので、これからも
数日感覚で投稿しますので、よろしく願います。

第三話 魔法使い（前書き）

いよいよ異世界を印象付けるような不思議な人物が行動を起こす。

第三話 魔法使い

・まずは今回の登場人物の紹介だったりする。

グレッツ・バディース（ ）

魔法使い。とりあえず名前だけは有名であるが、謎が多いためにいる

いような噂が立つことになる。何かの研究をしているらしいが、何の目的

でどのようなことをしているのかは不明。

ピックとはただの知合い以上の仲であるらしいが・・・。

第三話 魔法使い

グレッツ・バディース、その名前を聞いて知らぬものはいないと
言うくら

いに有名な人物で、魔法使いである。

魔法使い、それはこの世界では羨望の眼差しで見られるべき存在
で、一般

の人達ではできないようなことをやってのける者達のことである。

グレッツ

はその魔法使いであり、しかも特に高位の術を行使することができ
るのであ
る。

「誉めてもらえるとは光栄ですな、ふっ」

ピックは、渋い表情をますます曇らせていた。ゴブリンという種
族は、人

間に対しては威嚇的な態度を取るか、悪ければ攻撃を仕掛けてくる。

グレッツは、どうやらゴブリンたちを操作しているように見える。これも

魔法のなせる技であろうか。

「けっ、誉めてなんかねえんだよ」

「まあとにかく、今日はあなたにお願いがあつてここに来たのですから」

「俺に頼みだど？」

ピックは怪訝な目でグレッツを見た。

「そうです、あなたにある場所まで行ってもらいたいのです」

「ふん、俺がそんな話に乗ると思つてるのか」

「思つていますとも。当然でしょう、これだけのゴブリンがいることとですし

ね」

グレッツは勝ち誇つたように微笑み、ピッセルを見つめる。

ピックはグレッツを睨み付ける。あたかも、睨むだけで石化させることができる

できるバジリスクのように。

「うりゃーっ!!」

突然、ピックは動いた。あれほどにダメージを受け、なおかつグレッツの

魔法が効いているはずのピックが、しかもその動きの素早さは、ゴブリンが

身動きすることもできないくらいに速く、神速と言つてもいいくらいであつ

た。

ピックの目標は、当然グレッツである。

「でりゃーっ！」

ピックの必殺の一撃がグレッツに向かって繰り出される・・・そう思えた

瞬間、

「う、ぐ……ぐあつ……こ、このやろう……」

グレッツの身の周りから電撃が走り、ピックは気絶していた。

「残念でしたね。あなたは私の恐さを、忘れてしまっていたのですね」

グレッツは微笑みながら言った。しかしその笑みは冷ややかだった。

続く……

第三話 魔法使い（後書き）

この話でもまだ序章に過ぎないですね
最後まで続けられるか心配ですが、
頑張って投稿します（＾－＾；；；；；

第四話 奇妙な再会（前書き）

この話に登場する主人公、赤坂薫。
これからようやく彼の周りで何かが動き出す・・・。

第四話 奇妙な再会

今回は登場人物紹介はありません
では早速本編です・・・

日曜日、薫はこの日ふらりと散歩に出たのだが、それは昨日の夜に見た夢

が気になって仕方がなかったからだ。気になるといつても、それがどんな夢

だったのか、何が起こったのか薫は思い出せないのだったが・・・
とにかく薫は、バスに乗り駅に出る。駅から電車に乗る。

席に座り、ぼーっと外を眺める。電車が動きだし、外は町の景色から次第

に海の見える景色へと変わる。青い空がだんだんと曇り空になってきている。

そして、何時間たったのか、どこへ向かっているのかも分からないままに

電車は鳥取駅に着いていた。

駅から出ると、真つすぐに海の方に向かって歩いた。

誰なんだろう、私を呼ぶのは？・・・いや、何なんだこの感じは・・・。

薫は家を出る前から何かに呼ばれていたように、ずっとある場所に向かっ

ていたのだった。しかも無意識にである。

その場所とは、薫は意識していなかったのかもしれないが砂丘であつた。

しかし駅から砂丘までは、直線距離でもうキロはある。結局そこに辿り着い

たのは、駅を出てから1時間30分を軽く回ってからのことだった。
「うわぁー、やっぱり海はすごいなー」

海が見えたとたんに薫は、自分の物思いも断ち切って海に向かって駆け出していた。

「あれっ、あの犬は・・・この間の・・・」

不意に薫の目の端に、この前公園で出会った犬が映っていた。しかもそい

つは、薫の方を見ているようだった。薫がその犬の方に寄っていくと、犬は

急に駆け出していった。

「おい、どうしたんだ？」

犬はちよつと離れてから、また止まって薫の方を見ていた。どうやらつい

てこいと言っているように薫には思えた。

「行ってみるか」

そつと独り言のようにつぶやいて、薫は歩きだす。犬もまた歩きだす。

「おまえ、名前はなんて言うんだ？」

薫は相手が答えないと分かっているにもかかわらずにはいらなかった。しか

し、意外にも答えは帰ってきた。

『ワタシノナハ、ロデ・・・』

犬はこちらを向くとそう言った・・・ように見えたが、実は薫の精神に直

接語りかけていたのである。

「お、おまえ・・・話せるのか？いや・・・まさか・・・うーん」

薫は驚いていた。犬と話をすることが薫にとっては初めての経験であり、

しかも日本語で話しているのである。薫は、言いようのない不自然

さを覚え

ながらも、今まで呼び掛けていたものの正体が分かったような気がした。

『ハ、ハナセルサ』

しかしロデは話すのが難しいように、たどたどしく喋っている。

『オマエヲサガシテイタ、ドウカタスケテホシイ』

薫はロデと並んで走りながら、怪訝そうにロデの方を見た。

「助けるって、どういうことなんだ？」

『ソ、ソレハ、アトデハナス。イマハワタシニツイテキテクレ』

薫は迷った。しかしロデの瞳を見ると、それは薫にも関係のある重要な

なことだと感じられた。ロデはさすがのような目で薫をじっと見つめていた。

「分かったよ。話は後で聞く」

そして、薫はロデについて砂丘の端の方に向った。

続く・・・

第五話 虜囚（前書き）

罨に落ちたピック。

これからどうなるのか・・・。

第五話 虜囚

・まずは今回の登場人物の紹介だったりする。

ロデリック2世（16才、）

国王の息子にして騎士である。人一倍優れた直感の持ち主。

外見はあまりぱっとしないように見えるが、右目の下から左の頬まで

一直線に深い傷が走っており、凄味を見せている。

もともと性格は血気盛んで先走りやすいのだが、ひとつのことに執着しないことから飽きっぽい性格といえる。

第五話 虜囚

「・・・ん、ここは・・・うつ！」

ピックは、気が付くと周りを見回してみた。そして、起き上がるうとした

とき、体が何かに固定されて動けなくなっていた。手足には鉄の枷がはめら

れており、ピックは衣服以外の装備を取り上げられていた。

しかもピックは怪我をしているが、手当てはされなかったようだ。体中の

傷がずきずきと痛んだ。特に、グレッツから受けた傷はひどかったようだ。

ピックの視界が効く範囲で見回してみると、そこはどうかやから牢屋か

何かの部屋のように、床は石畳になっており部屋の隅に何かの道具

らしいも

のが並べられている。部屋自体は松明がかかっていて、あまり明るくなく

たが、見えなくらいに暗くはなかった。

この部屋にはピックの装備はなさそうだった。

「くそっ・・・せめて動ければ・・・」

手足を動かそうと試みるが、枷はしっかりと固定されていて動かない。逆

に下手をすれば血が止まってしまいそうなくらいに絞めてあり、感覚がなく

なりつつある。

その時不意に部屋の扉が開いて数人の人が入ってきた。部屋の入り口付近

は暗がりでありよく見えないが、足音や話し声で4、5人だとピックは判断した。

「ここにいるのが実験体3号です」

どうやらピックのことを言っているらしかった。

「おまえ達には苦勞をかけたな、もう戻ってもいいぞ」

どうやら今の隊長だろう。部下に対して言葉をかけている。

「それでは失礼します」

部下の1人と思われる人物がそう言うと、がちゃがちゃという鎧の音をた

てながら部屋から出ていったようだ。

隊長と思われる人物が、部屋のなかに入ってくる。

「おお、もう気が付いているようだな。調子はどうだね？」

ピックは、その人物を見たときに驚愕していた。

「これは何の真似だ？ 大体、どうしておまえがこんな所にいるんだ？」

「こんな所だと、おまえはここがどこだか分かっているのか？」

その人物、ロデリックは蔑んだ目でピックを見ていた。

ロデリック、この人物はカルミール王国の王子であり、したがってあのラ

イデルク１１世の子供なのである。

ピックはロデリックのことをよく知っており、というのもピックがロデリ

ックの武術の先生であつたからである。

しかしピックは、この時点でロデリックがいつもの彼でないことを察知し

ていた。まず目付きが違つていた。

ロデリックは、こんなに見下したような態度を取ることはなく、いつ

も澄んだ瞳をしていたはずだ、そうピックは思った。

「どうやら知らないようだな、だったら教えてやるよ。ここはな、ミンテス

の王城にある地下牢だよ、くくくっ」

ロデリックの言葉に嫌悪感を感じながら、ピックは考えを巡らせていた。

「どうした、俺の言つたことがそんなにショックだったか？まあ無理もない

な、かつておまえはここで王のために国を守っていたのだから」

ピックは黙つたまま何も答えようとはしなかった。まるでロデリックの言

つたことの意味を推し量ろうとするかのように・・・。

「まあすぐに楽にしてやるさ。その前にちょっと聞きたいことがあるんだが

・・・」

ロデリックはくくくつと低く笑いの声を漏らしながら、

「盾はどこにある？」

と聞きつつ、部屋の隅に向かつていった。そこには先程ピックが

見たこの
部屋の道具があつた。おそらくそれが拷問の道具だとピックは初
めて気付
いた。

「盾だと？」

今度はピックが逆に聞き返す番であつた。

「そつだよ、おまえは知っているはずだ。さあ、どこにあるのか言
つてもら

おう」

「盾つて言つたつて、何の盾なんだよ？」

「おまえは“霧の盾”を知らないのか？ いや、そんなはずはない」

ピックは霧の盾について聞いたことがあつた。霧の盾とは伝説の
武器で力

ルミール王家に伝わる家宝だと聞く。その盾にどのような能力があ
るのかは

王家の者にしか分からないと言われている。

「そうか知らないのか、だったらもう用はない」

そう言いつつ、ロデリックは部屋の隅にあつた道具を幾つか手に
していた。

「そんなことより、これから俺をどうしようというんだ？」

ピックが言つた。

「それは、後の奴らに任せることにしているんでな」

ロデリックが不敵な笑みを浮かべる。

ピックは今、袋小路に追い詰められたネズミのような気分になつ
ていた。

続く・・・

第五話 虜囚（後書き）

ちよつと間があいてしまいました。
とりあえずなんとか話までこぎつけることが出来ました。

第六話 侵入者（前書き）

危険な状況に追い込まれたピック。
このあと一体何が起こるのか？

第六話 侵入者

トン、トンと部屋の扉がノックされる。

「入れ」

ロデリックが短く言つと、扉が開いた。そして、ロデリックが開いた扉の方を振り返る。しかしそこには、ロデリックの知らない人物が立っていたのだらう。ロデリックはそちらの方をまじまじと見ている。

その人物は背が高く、外見はフード付きのマントに身を包んでいるため分からぬがかなりがっちりとした体格の持ち主であることだけは確かである。

その人物は、扉が開くと同時に中に躍り込んでいた。そして、その勢いのままロデリックに手刀を叩き込んでいた。

「な、なんだおまえは……ぐ、ぐあっ」

ロデリックは一瞬、自分の身に何が起こったのかも分からないまま気絶していた。

ピックは、その光景を目にしたときに驚いていた。あのロデリックが手刀の一撃で倒れてしまうほどに弱くはなかったはずだった。しかしロデリック

を倒せる程の腕を持つものとなれば、ピックも油断がならない思っていた。

「……………」

ピックは、声もなくそちらの方を見ていた。するとその人物はピックの方

に寄ってきて、剣をすらりと抜いた。抜き放たれた剣が不気味に光る。

「じゃあ、やるわよ」

それは紛れもなく女の声であった。しかしピックはその声をどこかで聞いた。

たことがあった。

そんなことを思っているうちにも、その人物は剣を上段に構える。ここでやられるのか・・・、ピックはそう思いながらその人物をじつと見

据えていた。

「はぁーっ!」

気合いと共に、剣が振り下ろされる。

「ぐぁーっ!」

ピックは、剣が振り下ろされると同時に叫んでいた。

続く・・・

第六話 侵入者（後書き）

とりあえずは書き貯めた話がほぼ出尽くしました。
この後は新たに書き続けますが、しばらく時間がかかると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9745e/>

3匹におまかせ

2010年12月15日02時38分発行